



The Japanese Association
of Organic Geochemists

Newsletter

Organic Geochemistry 73

Feb. 16, 2021

目次

Report 2

開催報告：有機地球化学「若手・学生オンライン研究発表会 2020」

奈良岡 浩

People 3

とある研究者の放浪記 —アイデアのゆりかご—

安藤 卓人

Information 8

日本有機地球化学会 2020 年度 年会費のお支払いについて

日本有機地球化学会 2020 年度 定時総会議事録

Announcement 13

2021 年度有機地球化学賞（学術賞）候補者推薦の募集

研究奨励賞（田口賞）2021 年度受賞候補者の募集

ROG36 巻へ論文を投稿しましょう！！

J-STAGE 2019 年 ROG 論文年間アクセス数ランキング！

編集後記 19

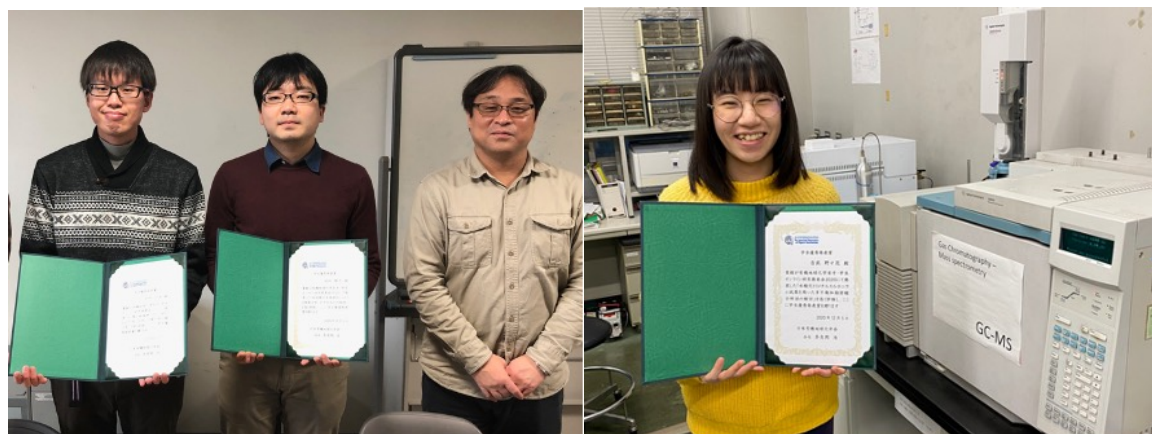
Report

開催報告：有機地球化学「若手・学生オンライン研究発表会 2020」

当学会主催の有機地球化学「若手・学生オンライン研究発表会 2020」が年末 12 月 5 日（土）に開催されました。本発表会は 9 月 3～4 日につくば市において開催予定だった第 38 回有機地球化学シンポジウムが新型コロナウイルスの影響で来年度に延期となったため、若手の発表機会を失わないように開催されました。また、今年度の研究奨励賞（田口賞）の受賞講演も合わせて行われました。発表エントリー開始が 10 月 5 日で、11 月 7 日の締切までに 14 件の発表申し込みがあり、そのうち 12 名が大学院生でした。板橋悠博士（筑波大）による受賞講演「先史時代人骨の化合物レベル同位体分析により古代文明以前の社会を探る」の 1 件を含めて、合計 15 件の口頭発表が Zoom を利用したオンラインで行われ、12 分間の発表時間と 6 分間の質疑応答で活発な議論を行うことができました（受賞講演は合計 30 分間）。また、学生の講演を対象とした優秀発表者の選考も行い、池田雅志さん（北海道大）、吉武野々花さん（創価大）、中村仁哉さん（北海道大）の 3 名に学生優秀発表賞が授与されました。コロナ禍の厳しい研究活動を強いられた環境下においても、研究成果をまとめて発表できたのは非常に良かったと思っています。土曜日の開催にも関わらず、日本有機地球化学会員を主として 41 名もの参加者（発表者を含む）があり、午前 10 時から午後 5 時まで積極的に発表会にご出席いただきありがとうございました。本学会として初めてのオンライン研究発表会でしたが大きなトラブルもなく、また、学会員・非会員によらず参加費も無料としたため、事務作業も軽減されました。発表会の案内は学会ホームページとメールで行われ、プログラム・要旨集は今もダウンロード可能です。開催の準備・進行・審査にご協力いただいた方々に心より感謝いたします。

2021 年となり、新型コロナ感染の状況は未だに厳しいですが、学会員の皆様におかれましては研究活動を維持しつつ、2021 年夏の有機地球化学シンポジウムに備えていただければ幸いです。

（九州大学・奈良岡 浩 会長）



学生優秀発表賞を受賞した北大・中村仁哉さん（左写真左）、池田雅志さん（左写真中央）、指導教官・沢田健さん（左写真右）、創価大・吉武野々花さん（右写真）。おめでとうございます！

People

今回は、島根大学・エスチュアリー研究センターの安藤 卓人さんにご寄稿いただきました。

とある研究者の放浪記 ―アイデアのゆりかご―

島根大学・エスチュアリー研究センター 安藤 卓人

1. はじめに

—『あれ？なんで研究 “なんて” しているのだろう？』

果たして、人生で一度もそんなことを思わない研究者が、この世に存在し得るのでしょうか？私のような未熟者なんて、毎日のようにそんな戯言を言っております。私には別の未来もあったのではないかと。きっと並行世界の私はもっと高収入で、一軒家に住んでいて…みたいな薄っぺらのラノベみたいな妄想です。しかし、実際のところ、そんなタラレバな世界はなく、私たちは日々研究 “なんて” しているわけです。

なんで研究 “なんて” しているかの問いに対し、私は、「やりたいことだから」とキレイごとを並べます。実際、知的好奇心が先行しているので間違っていないです。そうじゃないと、「理学」「地球科学」「古生物学」「有機地球化学」なんて分野をメインフィールドと謳うことはできないのです。ということで、研究 “なんて” と思ったら、私は「いまやりたいこと」を書き出すことにしています。書き出せなければ、研究者 “なんて” 辞めればいいのです。そのようにして、溜まっては吐き出しの葛藤を繰り返しているからこそ、今日の研究者としての私（たち？）があるのだと思います。なにが正しかったかは、人生を賭けない限り答えがでないのですから。

2. 動機 ～田舎者の価値観～

「地学を研究したい」と思ったのは高校生のころでした。もっといえば、小学6年生のときに初めて自由研究で化石を探したときなのですが、具体的に研究意欲が湧いたのは、たしか高校2年くらいのころです。小中高と吹奏楽部に所属し、男子率が数%の環境下でラッパ吹きをしていました。中学は海のそば（沖積平野）、高校は丘（洪積台地）の上でしたので、自然に向かって、ラッパをぶっ放していました。いま思えば、自然をボーっと眺めながら音を奏でるというのは、田舎育ちの特権でした。なぜ雲は流れ、木々が生き茂り、海はどこまで広いのか、なんて…さながらポエマー気取りでした。自然科学に興味を持つのは時間の問題だったのかもしれませんが。

そんな田舎者は、大都会サッポロの大学にAO入試で学力より好奇心を重視して転がり込みました。大学時代もオーケストラに熱中しましたが、地学への愛は治まりませんでした。古生物を研究したいと思っており、「カラスがニングンの次に世界を支配する」と語るN先生の研究室に決めかけたのですが、他大学に移ってしまって断念。実験で一番興味深かった「ビジュアルケロジェン分析」を指導してくれた沢田 健先生の研究室に入ることとなりました。ビジュアルケロジェン（＝パリノファシス）分析の何が面白いのか…有機地球化学の研究者ならわかってくれると信じております。さながら宝探しをするようにアモルファス有機物の宇宙をかき分けてパリノモルフの星々を探していく…あれ？今やっていることとなんら変わりませんね。私の宝物リストは日々更新中です！



▲父がプレゼントしてくれたアンモナイトと小学校の時に母と採取したサメの歯の化石

3. 開始 ～幕があがる～

さて、もう（まだ!?）11 年ほど前になりますが、いよいよ私の研究生活がスタートしました。最初にとりかかったテーマは「ケロジェン化学」。三フッ化ホウ素ジエチルエーテル錯体を用いて、結合態のステロイドやトコフェロール類などの環構造に官能基のある化合物をケロジェンから減成するという…なんとも化け化けした研究でした。しかし、元から複雑なテーマであったことに教育実習や院試も重なり、このテーマは半年で断念+封印し、「藻類バイオマーカーの研究」に漂着しました。実は高分子を取り扱う研究は今でも行ないたい研究で、心残りの一つです。ケロジェン化学という有機地球化学におけるある意味でアンタッチャブルな世界。どのように解き明かすか…様々な検討がなされてきましたが、その多くが未だに謎のベールに包まれている。流行りものの方が研究はしやすいはずなのに、つついマニアックな方向性に行ってしまう私は多分…変態なのでしょう。

そして、白亜紀海洋無酸素事変時の基礎生産者の研究にメインテーマがシフトします。前半の研究で化合物としてステロイドを扱っていましたので、起源生物指標として使えるようなジノステロイドに着目するのは半ば必然的でした。また、そのうち三芳香環ステロイドを用いた指標検討をしたのも、先輩である中村 英人さん（当時 D3）が植物テルペノイドで芳香族に着目していたので、要するに「研究室の流行」にのっただけでした（なんとも安易!）。まさか、延長戦で博士までこの化合物の同定に苦しまれるとは思いませんでしたが…。それはさておき、流されるままに行きついた藻類バイオマーカーの世界。ですが、最初の1年ですでに「やりたいこと」の核が仕上がっていました。

4. 没頭 ～愛に満ちた世界で～

そこから先は学会等に参加するようになったので、いろんな場での「出会い」が大事になっていきました。コツコツと研究を続けることも大事ですが、他の研究者とのコミュニケーションも重要です。沢田先生には、M1 のときから JpGU 連合大会から始まり、IMOG まで様々な学会に連れてってもらいました。研究を始めてまだ1 年ほどの私に對等に接してくれる優しい研究者たちと出会い、研究はひとりでやるものではないと思うことができました。このあとの私にとって重要になる『仲間』を「楽しませる」「ワクワクさせる」研究がしたいという考えは、その時芽生えました。どんな仕事でも重要な考え方かと思いますが、「科学」を通じて繋がることは非常に大事で、コロナ禍の今だからこそ余計に感じているところもあります。

そうして、私は博士課程に進学して研究を続けたいと思うようになりました。繋がりが大事になってくる傍らで、周りの研究者のレベルと志の高さに驚愕し、何か自分にしかできないことを探しはじめます。そこで目をつけたのは、昔から興味があった「古生物学」でした。M1 の冬、周りの皆が就活を始めるなか、バイオマーカーと古生物学との共通点を探りつつ、ひたすらに勉強を始めます。そして、「ビジュアルケロジェン法」のなかで、起源がわかる有機物である「パリノモルフ（有機質微化石）」の扱いが非常に雑であり、分類等をしっかり理解した上で有機地球化学的分析がしたいと思うようになります。このときに思い描いた研究は、数年後の今になって実現可能になっているのですが、当時は世界が広がっていくように感じ、ただひたすら研究にのめり込んでいきました。



▲初めての国際学会で観たスイスの山々

5. 転機 ～新たな世界への扉～

そして、博士課程。D1の時は研究生活を謳歌しました。D1が一番楽しい説に賛同する方々は多くいるかと思います。ひたすら実験を行ない、学会に参加し、あっという間に過ぎ去り、そして迎えた冬に転機が訪れます。初めて参加した国際シンポの口頭発表での大失態。…私は英語に苦手意識を持っておりました。そんななか、これもN先生から、IODPへ参加をしたらどうかと提案されました。時期はD2の冬、舞台はインド洋…2か月の船旅でした。同年にフランスでの初の海外のフィールドワークを経験させてもらいましたが、中高から続く英語への苦手意識がなくなることはなく、正直不安でいっぱいでした。しかし、JOIDESも住めば都。英語の訓練にこれほど適した場所はありません。これを機に、海外の研究者との会話や議論をするための「ハードル」が一気に下がりました。そして流れるようにD3のときには、単身でドイツに赴き、研究室訪問を行なってきました。そこで、憧れの研究者たちとも出会うことができ、現在は共同研究を行なうまでに至っています。

さてさて、楽しいときはあっという間に過ぎ去り、D3を通り過ぎてD4になっていました。D4は本当に今までの「ツケ」が回ってきたような状態でしたが、塾のアルバイト等をしながら、慌ただしい時を過ごしました。色々な先生方とのご縁があり、学位取得後には同じく北海道大学の北極域研究センターに勤めることになりました。初年度は低温科学研究所に通い、私の年齢を超えているバカでかい顕微ラマン分光器を使った新しい研究にのめり込みます。ふと気がついたときには、ひたすら1~2 μm のアイスコアを昇華して得た塩微粒子にレーザーを当て数千のラマンスペクトルを取得していました。自分こそ2017年に世界で最もラマン分光器を使った男ではないかと思うに至るくらい、新しい手法というのは大変魅力的なものでした。



▲D3 ドイツ独り旅：メッセルピットにて

6. 躍動 ～何がやりたいかを探る旅～

そんなある日、研究は自由にやっていいものだ。そんなことを突然思い始めます。きっかけは、藤子・F・不二雄ミュージアムに訪れたことでした。もともと、小さいころから「ドラえもん」という作品が私は大好きでした。ミュージアムには、F先生の書斎があります。そこにある本棚をみて、私は驚きました。そこには、地球惑星科学に関する本がズラリと並んでいたのです。そして、F先生の「科学感」と「人生観」が、「ドラえもん」を通じて、私の好奇心や人間性を形作っていたことに気が付きます。有機地球化学や古生物学、古気候・古環境学の研究が「ドラえもん」に与えた影響はもちろんですが、F先生が描いてきた世界をより再現するための研究ができる状況にあるのだと。「ドラえもん のび太の恐竜」の中で、のび太の試行錯誤を温かく見守るドラえもんの姿は、まさに私を支えてくれた研究者たちや家族そのものではないかと。気がつけば、既婚者かつまもなく30にもなるのに、のび太と自分とを結びつけて、感動で泣いている自分がそこにはいました。

そんなこんなで札幌にもどり、グリーンランドから届いたアイスコアの処理をしている最中のこと。低温室での作業も経験すること自体がレアなので、非常に満喫してはいたのですが、「やっぱり現地に行きたい」と思ってしまう。そもそもグリーンランドは地質学者にとっても憧れの地ですし…。最終的には、甘い誘いに乗ってグリーンランド北西部の調査に同行することになりました（しかも2年連続で）。氷山の浮かぶフィヨルドで試料を採ったこと、氷帽の上をひたす



▲グリーンランドのとある場所にて

ら歩いたこと、プレカンの大露頭で調査したこと、現地の生活を目の当たりにして彼らの「食」を経験したこと…まさに「ドラえもん」の世界ですが、そのすべてが私に「調査・研究の醍醐味」を思い出させてくれました。そういったこともあり、ついに「一番やりたかった研究」をするために、1ヵ月間だけですがドイツに研究修行に行くことも決意してしまいます。いま考えると採択された課題とはいえ、契約社員としては最低最悪です…。短いあいだでしたが、集中してパリノモルフの高分子分析の技術を習い、日本に無事に新手法を持ち帰ることができました。そして、これらの経験が更なる転機となり、現職へ繋がっていきます。

7. 自由 ～行き着く先は何処～

現在、私は島根大学・エスチュアリー研究センターで特任助教として研究を行なっています。任期は3年ですので、あと2年もすればこの地を去る必要があります。今は、中海で毎月調査をし、泥や水の中のパリノモルフやバイオマーカーの研究を行なっており、過去へとつなぐためのモダンアナログをとる研究を行なっています。調査の度にIODPやグリーンランドで感じた「調査・研究の醍醐味」を味わい、そして噛みしめながら研究を続けています。また、ポストドクのときに学んだ分光法を駆使して、M2の時に夢見たパリノモルフの高分子分析を進めております。最近、中海の堆積物試料からとても興味深いパリノモルフを発見し、今までの研究が繋がってきたことに感動していますが、それはまだまだ私の「小さい世界」でのお話。これから『仲間』を「楽しませる」「ワクワクさせる」研究へと昇華させるために頑張っていければと思っています。



▲高山から眺める中海と大山

これらの研究を進めるにあたって、北極域研究センターのポストドク中に裏で事前に進めていたことがあります。それは、水生パリノモルフの同定法に関する勉強です。水生パリノモルフの分布を理解し、それをバイオマーカーと繋げて有機地球化学と古生物学の両面から議論するには、まずは「同定」なのですが、日本でこれができる研究者は2~3人しかいません。このような研究は、古臭い手法と思われがちですが、脈々と受け継ぐ必要があると私は思います。ステロイドやホパノイドの同定も然りです。そして、いつしかそういった「消えかかった研究」に再びスポットライトがあたり、新たなサイエンスが生まれると信じています。密かに数年間勉強をつづけた結果、ようやく自分でデータを出せるレベルまで習熟し、「古生物学」の研究者と同じ価値観で話すことができるようになりました。そうやって築いた人間関係で、「微古生物学勉強会オンライン (On-Mic)」をコロナ禍の中で運営し、その流れで2020年の地球化学会でもオンライン運営に携わることになり、with コロナの研究のあり方を様々な分野の研究者と一緒に考えることができます。

8. おわりに

まとまりがありませんが、伝えたいことは、「すべては繋がる」、つまり、研究もコミュニケーションも（だけでなく何でも）、「無駄な事なんてない」ということです。論文をリジェクトされてばかりいる私が言えるようなことではありませんが、「いつかすべてが繋がる」と信じて研究や研究者コミュニティの維持をしていくことが、この先はとても大事になってくるのだと思います。なので、学生やポストドクの皆さん、もっと放浪しましょう。楽しくやりましょうというわけです。私は、有機地球化学会のアットホームな雰囲気がとても好きです。これからは皆で支えあい、時に切磋琢磨しながら、常に良い研究をしていければと思います。そのためにも、冒頭の『あれ？なんで研究“なんて”しているのだろう？』の問いは常に抱きつつも、それに対して「いまやりたいこと」をしっかりと答えられるようにしたいものです。

追記：全然関係ないですが、裏テーマとして、「音楽を続けながら研究をする」ということもしています。YouTubeには作曲・編曲した曲をアップしたりしています。ちなみに2回のドイツ研

究旅行はドイツ音楽に触れたかったという不純な動機も混じっておりました…。学会で行ったウィーンやプラハも最高でした。それはさておき、音楽は人を繋げます。JOIDES Resolution 号の船上、AGU open·mic でのバンド演奏、ICP paleomusicology での演奏はとても良い思い出ですが、それと同時に「あのラッパ吹きだ」と老若男女問わず私のことを認識してくれます。このようにコミュニケーションの「入り」として音楽は偉大です。もちろんちゃんと研究で認めてもらう必要はありますが…。一緒になにか演奏したい方を常に募集しています！



Information

一般社団法人 日本有機地球化学会 2020 年度年会費のお支払いにつきまして

平素より当学会の活動・運営にご理解、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

本会の会計年度は 7 月 1 日より翌年 6 月 30 日までとなっており、会員の皆さまには 当該期間内に年会費のお支払いをお願いしております。

2020 年度が始まってからおよそ 6 か月が経過し、多くの会員の皆さまに 2020 年度 年会費をお支払いいただいております。まだお支払いいただけていない会員の皆さまには、ぜひお早目の年会費お支払いのご協力をお願い申し上げます。

日本有機地球化学会会則第 6 条（一部抜粋）

会員は次の種別に従って会費を毎年度前納するものとする。

正会員：年額 3, 0 0 0 円

学生会員：年額 1, 0 0 0 円

年会費支払い方法はシクミネットによるオンライン決済システム（<https://m6.members-support.jp/ogeochem/>）

（メニュー → お支払い → 会費支払い）

（コンビニ、ペイジー、クレジットカードによる支払いが可能）

をご利用ください。

なお、2019 年度以前に未払い金がある場合、シクミネット経由では 2019 年度以前 の会費をお支払いいただくことができませんので、以下の郵便振替口座へのお振 込みをお願いしております。

振込み先：郵便振替口座 00110-7-76406

（名義人：一般社団法人 日本有機地球化学会）

その際、2020 年度の年会費と合算してお支払いいただくことも可能ですので、振込時の通信欄にその旨記載していただくと助かります。

シクミネット上の会員 ID 及び初期パスワード、会費納入済み年度など、ご不明な 点がある場合は、事務局（office@ogeochem.jp）までお問い合わせください。

どうぞよろしくお願いいたします。

一般社団法人 日本有機地球化学会 2020 年度 定時総会議事録

2020年8月26日（水）10：30～11：50

オンライン会議（ホスト設置場所：北海道大学低温科学研究所）

議長：滝沢侑子

出席者：20名参加（開始時）、委任状28名 計48名 総会成立

議題

第1号議案 2019年度事業報告

2019年度 法人成立前の事業

- ・第37回シンポジウム（2019年8月28～29日、石川県政記念しいのき迎賓館）
- ・総会の開催（2019年8月28日、石川県政記念しいのき迎賓館）
- ・理事会の開催（2019年9月12日、オンライン開催）
- ・有機地球化学賞（学術賞）高田 秀重 博士「水・堆積物環境における有機汚染物質の動態に関する研究」
- ・研究奨励賞（田口賞）伊左治 雄太 博士「テトラピロール化合物を用いた分子レベル生物地球化学循環に関する研究」、大西 雄二 博士「深海の特殊環境に形成する生物群集を対象とした安定同位体生態学の高度化」
- ・ニュースレター No. 70 （2019年7月16日発行）

法人化後（2019年11月1日～2020年6月30日）

- ・一般社団法人 日本有機地球化学会の設立（2019年11月1日）
- ・ROG Vol. 35（2019年12月発行）
- ・ニュースレター No. 71（2020年2月5日発行）
- ・理事会の開催（2020年5月22日、オンライン開催）

出席者多数により承認された。

第2号議案 2019年度会計報告（貸借対照表及び損益計算書）

令和2年7月1日現在(単位:円)			
科目	当年度	法人設立時	増減
[資産の部]			
【流動資産】			
通常貯金	1355655	1909937	-554282
定額貯金	1200000	1200000	0
郵便振替貯金	1193697	1135697	58000
流動資産合計	3749352	4245634	-496282
資産合計	3749352	4245634	-496282
[負債の部]			
【流動負債】			
前受会費	9000	0	9000
負債合計	9000	0	9000
[正味財産の部]			
【指定正味財産】			
基金	1296923	1296920	3
寄付金	0	0	0
指定正味財産合計	1296923	1296920	3
【一般正味財産】	2443429	2948714	-505285
正味財産合計	3740352	4245634	-505282
負債及び正味財産合計	3749352	4245634	-496282

令和1年11月1日から令和2年6月30日まで			
科目	正味財産	一般正味	指定正味
I. 正味財産増減の部			
(1) 経常収益			
受取会費	24,000	24,000	
受取寄付金	31,000	31,000	
雑収益			
受取利息	9	6	3
経常収益計	55,009	55,006	3
(2) 経常費用			
印刷製本費等	385,627	385,627	
通信運搬費	2,212	2,212	
委託費	157,674	157,674	
支払手数料等	2,398	2,398	
学会年会費	10,000	10,000	
雑費	2,380	2,380	
経常費用計	560,291	560,291	-
当期計上増減額	-505,282	-505,285	3
正味財産期首残高	4,245,634	2,948,714	1,296,920
正味財産期末残高	3,740,352	2,443,429	1,296,923

法人化前は一般会計と田口基金の通帳を分けていたが、法人化後は通帳は1つしか持てないという制約があり、通帳を一本化した。会計の表のスタイルも変更した。会計監査の三田幹事から細かな不備の指摘があり、修正を行った。

出席者多数により承認された。

第3号議案 2020年度事業計画(2020年7月1日～2021年6月30日)

- ・第38回有機地球化学シンポジウム(コロナ禍で、来年に延期)
- ・有機地球化学「若手・学生オンライン研究発表会2020」(2020年12月5日開催予定)
- ・定時総会の開催(2020年8月26日、オンライン開催)
- ・理事会の開催(2020年7月27日、オンライン開催；次回2021年12月頃開催予定)

定)

- ・将来計画委員会（名誉会員の推薦）
- ・学術賞受賞候補者選考委員会
- ・田口賞受賞候補者選考委員会
- ・ROG 編集委員会、記念事業・マニュアル編集委員会
- ・共催：日本地質学会第 126 年学術大会（コロナ禍で延期）
- ・ニュースレター No. 72（2020 年 7 月 2 日発行），No. 73（2021 年 2 月）
- ・ROG Vol. 36（2020 年 12 月発行予定）
- ・理事・監事（2021～2022 年度）の選挙

出席者多数により承認された。

第 4 号議案 2020 年度会計計画

2020年度一般会計		2020年度予算	2019年度実績
収入	賛助会費	¥160,000	¥0
	個人会費(2020年度分)	¥344,000	¥24,000
	個人会費(2019年度以前未納分)	¥97,000	¥31,000
	ROG販売	¥0	¥0
	シンポジウム協賛金・剰余金	¥0	¥0
	シンポジウム参加費	¥0	¥0
	計	¥601,000	¥55,000
		2020年度予算	2019年度実績
支出	ROG印刷費	¥350,000	¥352,000
	ROG送料	¥30,000	¥33,627
	HP維持費	¥28,000	¥25,300
	シンポジウム費用	¥0	
	事務局経費・雑費	¥210,000	¥149,364
	法人道民税	¥20,000	
	法人市民税	¥50,000	
	計	¥688,000	¥560,291
収支総計		¥-87,000	
2019年度繰り越し		¥2,443,429	
年度末資産予測		¥2,356,429	
2020年度田口基金		2020年度予算	2019年度実績
収入	予算		
	利子	¥0	¥3
	総計	¥0	¥3
支出	副賞	¥50,000	¥0
	関連経費	¥0	¥0
	源泉徴収	¥1,531	¥0
	計	¥51,531	¥0
収支総計		¥-51,531	¥3
2019年度繰り越し		¥1,296,923	
総計		¥1,245,392	

会計担当より，法人化後は ROG の販売に伴い税金がかかるので，ROG の販売を停止すること，税金については調査中であるとの報告があった。

地球惑星科学連合の会費が抜けているので追加するようにとの意見があった。追加するとの会計担当からの返事があった。

シクミネット利用料が高価であるので，今後の検討が必要という意見があった。一方で，ROG 出版費の増減が大きいので，細かな赤字は気にする必要があるかもしれないとの意見があった。

事務局より，税金については未定な部分があるとの返答があった。

出席者多数により承認された。

報告事項

将来計画委員会よりの推薦を受け、以下の3名を名誉会員として、7月27日の理事会で承認した。

河村公隆会員（2012～15年会長）、武田信従会員（2004～06年副会長）、加藤進会員（2012～15年副会長）

会員状況

正会員110名、学生会員15名、シニア会員5名、名誉会員9名、賛助会員7名
賛助会員4法人、合計150名

2020年度顕彰者

有機地球化学賞（学術賞）：長谷川卓会員（金沢大学・教授）「陸源有機物の炭素同位体比変動を用いた白亜紀の環境解読に関する研究」

研究奨励賞（田口賞）：板橋悠会員（筑波大学・助教）「考古学試料の高精度分子レベル同位体分析による食料生産社会成立の解明 - ^{14}C 年代測定と食性復元の分子科学アプローチ -」

Researches in Organic Geochemistry Volume 36 (36巻) 編集状況

Vol. 36, No. 1 を2020年10月（web公開）、No. 2 を2020年12月に刊行予定。

ROGの論文PDFファイルの公開はJ-STAGEに一本化することになった。J-STAGEの更新はこの8～9月に行う予定。

会長より、12月に若手中心のオンライン発表会を行い、近日中に案内をまわすので、奮って発表を申し込んでいただきたいとの発言があった。

昨年末にご逝去された下山元会長に黙祷を捧げた。

以上。

書記：山本正伸（北海道大学）

Announcement

2021 年度有機地球化学賞（学術賞）選考候補者推薦の募集

有機地球化学賞（学術賞）2021 年度受賞候補者選考委員会

委員長 三瓶 良和

有機地球化学賞（学術賞）受賞者選考規則により、2021 年度同賞選考候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記を参照のうえご推薦ください。

記

候補者の資格：有機地球化学の分野で顕著な学術業績をあげた本会会員。

募集の方法：本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。

推薦の方法：下記の事項を A4 サイズの用紙に任意の様式で記入し、書留（簡易書留で可）で郵送してください。（下記の「1）候補者の履歴」を除いて、同内容のものを電子メールでも送付してください）

- 1）候補者の履歴（大学卒業以降の学歴、職歴、その他）
- 2）推薦の対象となる研究題目および推薦理由
- 3）研究業績目録
- 4）推薦の対象となる主要な論文 10 編（別刷またはそのコピー）
- 5）推薦者の氏名と連絡先

締め切り日：2021 年 5 月 31 日（月）（当日消印有効）

提出および問い合わせ先：〒690-8504 島根県松江市西川津町 1060

島根大学 大学院自然科学研究科

三瓶 良和

電話 0852 32 6453、ファックス 0852 32 6469

E-mail : sampei@riko.shimane-u.ac.jp

これまでの受賞者と研究題目については <http://www.ogeochem.jp/archives.html>
（日本有機地球化学会HP「学会アーカイブス」）をご覧ください。

研究奨励賞（田口賞）2021 年度受賞候補者の募集

研究奨励賞（田口賞）2021年度受賞候補選考委員会

委員長 山中寿朗

研究奨励賞（田口賞）受賞候補者選考規則により、同賞受賞候補者推薦を募集いたします。つきましては下記をご参照のうえ、受賞候補者をご推薦下さい。

記

候補者の資格：生年月日が1986年4月2日以降であり、有機地球化学、石油地質学、堆積学の3分野のいずれかで優れた研究を行い、将来にも研究の発展を期待できる方。本会会員に限りません。

募集の方法：本会会員の推薦による（自薦他薦を問いません）。推薦の方法：A4サイズの用紙に下記事項を任意の形式で記述し、郵送するか、PDFファイルとしてE-mailに添付してお送り下さい。

- 1) 推薦理由及び研究題目
- 2) 研究業績目録
- 3) 研究論文の別刷りまたはコピー
- 4) 履歴書
- 5) 推薦者の氏名と連絡先

*ご存知の通り、同一年度に複数名の受賞ということもあります。会員の皆様におかれましては、是非とも候補者ご推薦のほどお願い致します。

締め切り日：2021 年 5 月 28 日（金）（当日消印 有効）

提出及び問い合わせ先：〒108-8477 港区港南 4-5-7

東京海洋大学海洋資源環境学部門 山中寿朗

電話&ファックス：03-5463-0600 E-mail：t.yamanaka@kaiyodai.ac.jp

これまでの受賞者と研究題目については <http://www.ogeochem.jp/archives.html>（日本有機地球化学会 HP「学会アーカイブス」）をご覧ください。

**ROG 36 巻 1 号が WEB 公開予定。
ROG 36 巻へ論文を投稿しましょう！**

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 沢田 健

ROG (Researches in Organic Geochemistry)は本学会の学会誌であり、有機地球化学およびそれに関連する分野の研究論文を掲載し、WEB 公開および冊子を発行しております。残念ながら 2020 年は投稿論文数が少なく、ROG Vol.36 の発刊は 2021 年に持ち越すことになりました。しかし、Vol.36, No.1 の WEB 公開を今月中には行う予定です。今後、Vol.36, No.2 (または Vol.37, No.1) として論文を編集し、Vol.36 (または Vol.36/37) としてまとめて 2021 年 12 月末に発行する予定です。また、ROG Vol.36 (または Vol.36/37) の冊子を遅くとも 2022 年 1 月頃に本学会会員の皆様の下に郵送にてお届けしたいと考えております。2020 年はコロナ禍の影響もあってか、投稿された論文が極端に少なく 2020 年巻を発刊できない状況になりました。しかし、世の中の劣勢に負けず研究・執筆活動を進められて、その成果をぜひ ROG へご投稿してくださるよう、どうぞよろしくお願いいたします。

現在の ROG の論文のカテゴリーは、1) 論文(article)、2) 短報(short article)、3) 技術論文(technical paper)、4) 総説(review)、5) 議論(discussion)になります。有機地球化学会シンポジウムで発表された内容や、博士論文・修士論文成果の発表なども歓迎いたします。詳細は、学会ホームページ、または ROG Vol.35 の巻末の投稿規定をご参照ください。また、上記の枠に入らない論文や企画でも、有機地球化学の発展に貢献し、学会員にとって有意義な論文・企画であれば、随時、編集委員会で検討を進めます。ROG は研究分野・領域の**ボトムアップ**をより重視した性格の雑誌であり、日本の有機地球化学の技術者・研究者が提案する挑戦的・草分け的なアイデアなどを積極的に掲載したいと考えております。積極的に編集委員会にお問い合わせ下さい。その他、いろいろなご意見、ご要望、ご感想をお寄せください。

ご投稿・ご連絡は下記までお願いいたします。

PDF 添付ファイルによる電子投稿： sawadak@sci.hokudai.ac.jp

郵送：〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目

北海道大学 大学院理学院 地球惑星科学部門

沢田 健 編集委員長宛

(TEL: 011-706-2733, FAX: 011-746-0394)

J-STAGE 2019 年 ROG 論文年間アクセス数ランキング！

Researches in Organic Geochemistry

編集委員長 沢田 健

ROG に掲載される論文は電子版として J-STAGE (ジェイ・ステージ; 科学技術振興機構 (JST) が運営する電子ジャーナルの科学技術情報発信・流通総合システム) に WEB 公開されています。昨年から学会 HP における ROG 公開を簡略化し、J-STAGE にバックナンバー等をすべて一本化して公開しています。皆様もお気づきと思いますが、この J-STAGE では ROG 掲載論文の月間アクセス数ランキング (上位 5 つの論文) を毎月自動的に公開するサービスがあります。このアクセス統計データを基にして、2019 年の論文年間アクセス数ランキングをまとめました。以下、統計データの概略を参考にして、年間ランキングをご覧ください。

- ・書誌事項アクセス数とは、その論文のタイトル・抄録(abstract)・文献などが掲載されている J-STAGE ページにアクセスした件数です。
- ・論文 PDF ダウンロード数とは、J-STAGE 上にある論文 PDF ファイルをダウンロードした件数です。
- ・J-STAGE のサービスでは統計データを 2 年間しか保管しません。したがって、現時点でもっとも古いデータが 2019 年 1 月のものになります。最新データは 2020 年 11 月です。
- ・書誌事項アクセス数のランキング上位は最新巻の論文になる傾向があると思います。一方で、論文ダウンロード数の上位の論文は必ずしも最新とは限らない傾向が見えています。論文ダウンロード数の上位の論文は、1) 特集巻 (Vol.23/24、26、27) の掲載論文、2) 和文総説、3) 方法をまとめた論文という傾向が見えます。

今後もこのような年間論文アクセス数ランキングを公開したいと考えております。また、J-STAGE の統計データを基に英文論文だけのアクセス数ランキングや、やる気になれば、海外からのアクセス数やアクセスした国のランキングもまとめることができます。

表 2019 年 ROG 論文年間アクセス数ランキング

論文 PDF ダウンロード数

順位	論文タイトル	著者	Volume	カウント
1	元素分析/同位体比質量分析計(EA/IRMS)を用いた炭素・窒素安定同位体比の測定方法とその応用	佐藤 里恵, 鈴木 彌生子	26	385
2	イオンペクロマトグラフィー／電子スプレーイオン化質量分析法 (LC/ESI-MS) によるアミノ酸のマスマススペクトル解析	高野 淑識, 力石 嘉人, 大河内 直彦	31	370
3	宇宙地球物質に含まれる有機化合物の同位体組成に関する研究	奈良岡 浩	26	357
4	堆積有機物に記録されたペルム紀/三畳紀境界の環境擾乱期における陸域生態系の荒廃	沢田 健	23/24	279
5	ペルム紀-三畳紀境界の遠洋域深海堆積岩の古生物学的地球化学的研究	高橋 聡	29	262

6	日本近海のメタン湧出点における嫌氣的メタン酸化古細菌の群集組成	荻原 成騎	26	203
7	アミノ酸の窒素同位体比を用いた生物の栄養段階の解析：陸上環境を含めた生物生態系の解明に向けて	力石 嘉人, 高野 淑識, 小川 奈々子, 佐々木 瑤子, 土屋 正史, 大河内 直彦	27	194
8	ガスクロマトグラフ/同位体比質量分析計による分子レベル安定同位体比分析法	力石 嘉人, 大場 康弘	23/24	181
9	陸起源バイオマーカーの安定同位体比による大気循環と陸域環境変遷に関する研究	山本 真也	28	170
10	海洋堆積物中ステロールの GC/MS 分析： TMS エーテル誘導体化	山本 修一, 近藤 寛, 石渡 良志, 上村 仁	31	168
11	国内天然ガスの炭素同位体地球化学	早稲田 周	26	154
12	海洋堆積物中ステロールの GC / MS 分析： メチルエーテル誘導体化	山本 修一, 大力 千恵子, 島田 学, 中國 正寿	31	122
13	隕石有機物の構造・同位体分析による母天体変成過程の化学的解明	藪田 ひかる	23/24	121
14	ペルム紀末大量絶滅時の硫化水素大量放出事変	海保 邦夫	23/24	120
15	アミノ酸（ピバロイル/イソプロピルエステル誘導体）の GC/MS による解析	力石 嘉人, 高野 淑識, 大河内 直彦	25	119
16	粘土鉱物組成および全有機炭素・全窒素濃度からみた宍道湖湖底堆積物の特徴	三瓶 良和, 吉田 憲司, 平坂 健, 鈴木 徳行, 松本 英二	8	115

書誌事項アクセス数

順位	論文タイトル	著者	Volume	カウント
1	元素分析/同位体比質量分析計(EA/IRMS)を用いた炭素・窒素安定同位体比の測定方法とその応用	佐藤 里恵, 鈴木 彌生子	26	415
2	Compression of trophic discrimination in $^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$ within amino acids for herbivorous gastropods	Bohyung Choi, Yuko Takizawa, Yoshito Chikaraishi	34	172
3	イオンペアクロマトグラフィー／電子スプレーイオン化質量分析法 (LC/ESI-MS) によるアミノ酸のマススペクトル解析	高野 淑識, 力石 嘉人, 大河内 直彦	31	164
4	Change in the $\delta^{15}\text{N}$ value of plant amino acids on the phenology of leaf flush and senescence	Yuko Takizawa, Yoshito Chikaraishi	33	156
5	地衣類ハナゴケ属およびオオロウソクゴケ属から検出された 脂肪族炭化水素：化学分類・環境指標の可能性	池田 A. 雅志, 中村 英人, 沢田 健	34	151
6	Higher plant triterpenoids bound in resistant macromolecules in extant and Pliocene fossil Liquidambar fruits	Ken Sawada, Takaaki Arai, Hideto Nakamura, Minoru Tsukagoshi	34	139
7	天然ガス・石油の成因と微生物の寄与に関する有機地球化学的研究	坂田 将	34	110
8	アミノ酸（ピバロイル／イソブチルエステル誘導体）の GC/MS による解析	高野 淑識, 力石 嘉人, 大河内 直彦	32	109
8	ガスクロマトグラフ/同位体比質量分析計による分子レベル安定同位体比分析法	力石 嘉人, 大場 康弘	23/24	109
10	不飽和脂肪酸の極性カラムを用いた GC/MS 解析	内藤 裕一, 山口 保彦, 力石 嘉人, 大河内 直彦	26	98

編集後記

新年明けましておめでとうございます。昨年はコロナ禍に見舞われ、有機地球化学会だけでなく、ほとんどの学会がオンライン化し、なかなかリアルでの交流の機会が持てなかった 1 年でした。People で安藤さんが仰っておられるように、有機地球化学会はアットホームな人と人との繋がりが魅力的な学会なので、今年こそは皆さんと筑波にてリアルにお会いできることを願っております。一刻も早くコロナ禍が収束しますように（菅原）

あけましておめでとうございます。オンラインで色々出来るようになり便利になりましたが、一方で出張先でも会議に参加できるようにな（ってしま）ったことに関しては「うーん...」と言った感じです。オンラインだと現場の空気が分かりにくいので話すタイミングが難しいですね（中田）

新年明けましておめでとうございます。コロナ禍は人間社会に変革を促していると思いますが、デジタルトランスフォーメーションにやや遅れをとっていて、若干老いを感じてきました。今年はそういった変革により新しくできることを色々考えていきたいと思います。オンライン学会はやはり SNS した若い研究者には大変人気のようです。（金子）

発行責任者 日本有機地球化学会会長 奈良岡 浩

〒819-0395 福岡市西区元岡744 (ウエスト1号館A棟5階 W1-A-529)

九州大学 大学院理学研究院地球惑星科学部門 & 惑星微量有機化合物研究センター
(TEL) 092-802-4216 (FAX) 092-802-4208

一般社団法人日本有機地球化学会 事務局

〒060-0819 北海道札幌市北区北19条西8丁目

北海道大学 低温科学研究所 同位体物質循環分野

事務局長 力石 嘉人

Phone : 011-706-5472 (直通)

E-mail : office@ogeochem.jp

編集者 金子 雅紀（産業技術総合研究所）、中田 亮一（海洋研究開発機構）、

菅原 春菜（宇宙航空研究開発機構）：

e-mail: rog_nl@ogeochem.jp